全国まなべ会会報

編集と発行　全国まなべ会広報部　事務所

〒763-0053　香川県丸亀市金倉町1544-1
TEL＆FAX　0877(89)9530

第四十回大会を祈願

全国まなべ会
会長
真鍋光廣

３年越しのコロナ禍となり、その波状攻撃も第６波を数え、お仕事にもまた暮らしにも大変な不自由を強いられておりますが、全国まなべ会の会員皆様にはそのような中でも変わりなくお元気でお過ごしのことと存じます。

コロナの新規感染者は２０２０年末24万人でしたが、一年後の２０２１年末には１７３万人となり、更に今年に入ってからは１月の１ヶ月だけで約１００万人と激増しています。ところで、これだけコロナが隆盛を極めていますのに不思議と聴かないのがインフルエンザのことです。例年国内のインフルエンザ感染者は１０００万人、人口の８パーセントで、死者が一万人位と推定されているのですが、コロナ禍の蔭でインフルエンザは実にヒッソリと静かにしています。

インフルエンザの最流行時とされる12月下旬から１月中旬（12月20日～１月16日）の感染者数を全国５０００ケ所の定点観測で見ますと、２年前は35万人であったものが、昨年、今年はそれぞれわずかに２７７人、１９８人となっています。実に例年の１５００分の１と感染者は比較にならない激減ぶりです。

なんの慰めにもならない話ですが、そろそろコロナもインフルエンザ並みに考えてもいい時期が近付いて来ているのかとも感じられます。

さて、第40回大会のことですが、今年こそは青葉の季節に陽光輝く瀬戸内で皆様とお目にかからせていただきたいものと心待ちしておりますが、この際誌面でも念願成就の祈願をさせていただきます。

皆々様にはくれぐれもお身体を労られ、明るく朗らかな日々を送られんことをお祈りして、ご挨拶とさせていただきます。

（２月上旬記）

残念ながら、祈念は届きませんでした。

はじめに

今年に入ってもコロナのオミクロン株蔓延が拡大していて、未だ縮小する気配が見えてきません。デルタ株が終息したために、政府、国民とも安心したきらいがあったのかもしれません。政府関係での担当大臣も交代していて、はなはだ統合性の無い機構であり、継続性がありません。重大時期での非継続性は腑に落ちません。異例であります。

しかし、末端機関のしがない地方組織であるわたしどもにとっては、この春に全国大会が開催できなければ三回目の休会になるのです。三年間のブランクが出れば、組織運営は難しくなるかもしれません。そのためには、会員間の連帯を維持するためにはどうすればよいのか、良い思案を出さねばなりません。会員の方々から良い意見やニュースを頂きたいと思うのですが、しかし会報誌への投稿を依頼しておりますが、不慣れなためでしょうか、集まらないのが現状であります。しかし幸いなるかな、個人的に郷土に関する歴史を研究されている会員もおられ、その成果を知らせていただきました。今回は西行と真鍋島を視点とした論考を頂きました。あれやこれやで、やっと今回の会報誌が完成しました。

ここ両年のコロナ感染症の難題を抱えて、社会は大きな変革期を迎えています。社会や身近な生活環境も変わるかもしれません。これから発生する諸問題をも想定して、会員皆様方とご一緒に方向性を見出し、明るい未来形成のため共に前進して参りたいと心に念じております。

國六　記

お知らせ・本年度の全国まなべ会大会の延期について

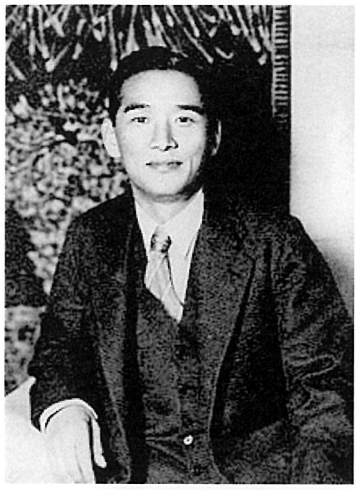
ご承知の通り、新型コロナでのオミクロン株蔓延の終息が当分期待できませんので、残念ですが本年度の開催は取りやめとさせていただきます。つきましては、健康に充分ご留意くださいますよう祈念申し上げます。

本部事務局

元気な時代のあの頃に

終戦後の物資の少ない頃にはこれといった娯楽もなかったけれど、野球やボクシングが面白かった。野球は小学校の四年ごろから先輩による、むしろ強制的な勧誘により始めたものだった。田舎では皮のグローブは無く布製のものであったから、試合中にボールが網糸に引っかかって取れずに打者をセーフにさせてしまったのを憶えている。

プロ野球では巨人の本拠地が後楽園であったが、ここの後楽園ホールでかつてプロボクシングの世界タイトルマッチ戦が行われていた。この時にマイクを持ってリング上で挨拶しておられた方こそ、日本ボクシングコミッショナーの「**眞鍋八千代**」氏であった。



眞鍋八千代 氏

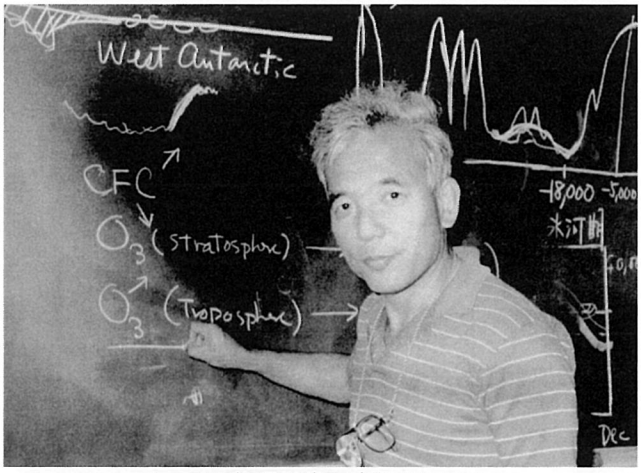
この頃の世界選手権試合では必ず挨拶をされていた偉大な方であり、お名前に強烈な印象を持ったことがあるのを想い出す。同じ「まなべ」の姓である。この方こそ、わたし達全国まなべ会の初代会長であられた**眞鍋藤治**氏（明治34年誕生）の従兄に当たる方であった。八千代氏は、当時後楽園スタジアムの取締役社長をされており、また当まなべ会第35回熱海大会が開催された時の会場宿舎「熱海後楽園ホテル」の社長もされていた。このホテルでは、巨人が優勝したときには必ず祝賀会開催の指定場所になっていた。

眞鍋藤治 氏

さて**眞鍋八千代**氏は、明治27年に北海道で誕生されたが、そもそもご先祖のルーツは愛媛県宇摩郡土居町である。新天地の北海道へ開拓のため一族で入ったものである。彼は後には東京へ出て、中央大学の法科を卒業され弁護士になっておられた。ご承知のごとく終戦後の社会は混とんとしていて、おまけに会社経営は組合活動が盛んなため難儀を強いられていた。当時の社会では会社の整理・倒産などの状況に遭遇していたが、弁護士先生である**眞鍋八千代**氏には多くの相談が持ちかけられていて、監査管理の業務に精通していたこと、並びに人柄も温厚なため多方面から相談を受け、関わった該当会社の役員や監査役にご就任されていた。そのため、当時の財界において顔が知られるようになっていた。一方、関西においては小林一三氏（明治6年誕生）が観光関連産業や運輸業界など多くの分野に関わり、またその後は政治家にもなられ、第二次近衛内閣では商工大臣にも就任されていた。この小林氏とのご縁もあり、当時には日本国内の東と西においてそれぞれ意欲的に活躍をされていた。それというのも、**眞鍋八千代**氏の奥様は小林一三氏の親戚（姪の夫）であった関係で、小林氏の誘いで実業界へ入っている。お互いが協働的に事業推進されていたのである。

小林一三 氏

さて、小林一三氏は宝塚歌劇団の生みの親であり、阪急電鉄、宝塚温泉、沿線の住宅地開発、そして宝塚歌劇とのコラボレーションによる相乗効果で、一大経済圏を確立されていた。また関連企業としては、阪急産業もあった。この会社の社長をされていたのが兵庫まなべ会で全国役員をされていた**眞鍋英壽**氏である。この阪急産業の先代社長は堀田正行氏であり、この堀田氏の息女が**眞鍋英壽**氏の奥様である。このお二人方は丸亀市土器町のご出身です。明治23年に土器村が発足したが、これより終戦後の昭和21年までに12代の村長が就任されてい



ノーベル物理学賞の真鍋淑郎さん、
50年前に地球温暖化を予測していた

る。このうち8代の村長は「まなべ氏」に関わる人たちである（＊讃岐まなべの歩み66～67ページ参照）。

ところで、昨年には伊予新宮のご出身である**真鍋淑郎**先生がノーベル物理学賞を受賞された。地道で根気のいる学問分野ですが、実績を積み上げられ国際的な名声を得られた。まなべ同族にとっては大変名誉なことであり、誇りとするものです。先生は非常に柔軟な発想をされる方であり、大変打ち解けた性格でもある。東大の大学院を卒業された後、昭和33年（1958）にアメリカへ渡られた。先生を受け入れる適切な就職口が当時無かったためである。その後若くして国籍を移されておられるが、日本を慕う気持ちは大きいものがあります。

先生は平成9年（1997）には、当時の科学技術庁に招聘され、一時日本に帰っておられる。地球フロンティア研究システムのリーダーとして4年間地球温暖化研究で過ごされていた。しかし日本の組織機構は行政主導であるため、硬直的であり、おまけに柔軟性に欠けていて、事業進展が意図するようにできない状況であった。いわゆる丁々発止の意見交換もなく、また予算確保にも障害が多く、時間を削がれていたのではなかろうか。この日本的な研究体制に嫌気がさしてアメリカへ帰っていったと推測される。しかしアメリカへ帰国され、そのまま元在籍していたプリンストン大学の上席研究員として継続して研究に取り組まれている。その後は何度か名古屋大学へも来られていた。

先生は、温暖化の予測法を開発した人であり、信条として「研究で一番大切なのは多様性である」と言われる。また先生は「研究の原動力は好奇心である」とも言っていることから、日本の組織風土に馴染めなかったものであろう。

上述のお二人かたを始めとして、幾人もの「まなべ」の人を観察してみると、とても柔軟な発想と粘り強く努力する人たちとして垣間見ることが出来る。

どうも「まなべ」という同族は海洋民族性の血を引き継いでいるためか、開拓者魂を心中に秘めた進歩性や自由性を志向する性癖がある民かもしれない。また、このような混沌とした世情の中にあっても、確固たる方向性の眼力（予知能力に長けている）と強力な意志を持った一族かもしれません。時代の大きな変革期にあっては、このような強い意志と方向性を持った人材が必要とされるのではなかろうか。他者から勧められ行動するのではなく、将来の事態発生を事前に想定・予測して行動を起こすプラン設定こそ重要ではなかろうか。現今の為政者たちは、二言目には想定していなかった事態であったと、言い訳するのを常態化している。また官僚たちも事態が発生してからでないと動き出さないという性癖傾向があるようである。いわゆる受け身の姿勢である。本来的には、政治家と官僚は連携・一体化せねばならぬ関係にあるのである。

わたし達の「まなべ」会発足時には、意気と誇りをもって組織を立ち上げたのである。当時の初代会長であった**真鍋藤治**様初め、二代目会長である**弘**氏など諸先輩方は意気と情熱、そして行動力でもって組織を拡大維持してきた。しかしここ近年では、政治経済の劣化が進み沈滞化しているところへ、また新型コロナ感染という難題にわたし達は遭遇している。これは組織存続の浮沈にかかわる大きな問題となって来ているのです。

しかしこの重大難問に対しては、公的面で見れば日本のトップ層には、危機管理能力の脆弱さ、そして未来への想定能力にも欠けているため、確たる施策指針もすばやく確立できず、国民に対し明確な指針、メッセージを発出できていないのです。総合統括的に立案・指揮する人材に欠けているのが残念であります。

わたし達の先輩方は未来予想力に長けていて、四十余年に至る今日まで組織活動を継続してきました。まなべ会の会報誌に至っては時を得た記事も掲載し、未来も想定した

記事も紹介している。小さい組織ではあるけれども、幕末期前後に活躍した備中松山藩の偉人「山田方谷」が信条として言われる「事の外」すなわち鳥瞰の目(未来想定能力・大局観)、そして危機管理の重要性を理解し行動する人材を抱えている強みがあるのです。**即ち歴史を知り、歴史から学ぶ真摯さを持ち、そして目的に沿って実行する力を持ち合わせているのです。**

現在、この期の重大感染症問題に遭遇しており、未来展望を開くためには、相当な期間が必要であると考える次第です。このような時こそ会発足時の原点に返り、一息入れねばならないと感じるのです。意気と知恵を働かせて邁進せねばならない。わたし達のまなべ会組織はこれまで実績を積み重ねてきたのです。この氏族組織には、たぎる情熱そして英知を集めて難関突破に突き進んでもらいたいと強く希望するものです。立派な先輩たちが確立した稀有なこの組織を、誇りと情熱を持って共々に継承運営してゆきたいと願うものであります。

最後に当たり、全国会員の皆様、そして私たちの活動にご賛同の皆様方のご健勝ご多幸を祈念申し上げ挨拶に代えさせていただきたいと存じます。

不一

全国まなべ会役員
真鍋國六
(山田)方谷研究会会員

各地からのトピックス

讃岐から

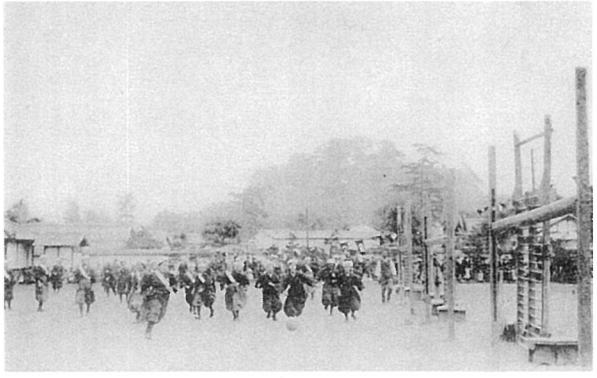
日本女子サッカーの澤穂希や宮間あや選手が、かつて国際的な活躍をして大変盛り上がっていたが、旧制高等女学校の大正時代においてもここ丸亀において「大正なでしこ」として運動場で元気よくボールを追って試合している絵葉書が発見されている。当時はサッカーではなく、フットボールと呼称されていた。

この絵葉書は大正八年(１９１９)に撮影されたものといわれる。この絵葉書はわたしの友人である松田房徳氏の父が、１９９２年に丸亀資料館に寄贈された絵葉書33枚の内の一枚である。

この発見の経緯については、某郷土史研究家の方が第一次大戦中にこの丸亀にはドイツ兵の俘虜収容所があったことで、この関係資料を探索中に見つけたものです。

またこの松田氏からは、先般の全国会報誌第59号で八千草薫さんのルーツは三豊市詫間町であるとの情報を頂き載せています。なおこの松田家そのもののルーツは、備前岡山の有力戦国大名であり、宇喜多直家の裏切り謀反により讃岐に移って来たものです。

松田氏は郷土史家として今でも地元の歴史探索に大変貢献しておられる。



大正時代に丸亀高等女学校の運動会で行われたフットボール(サッカー)を写した絵はがき

オーストリアから

國六様　お久し振りです。

その後お元気にて、瀬戸内海の良い空気を吸われてご活躍のこととお察し申し上げます。先日國六様からの全国まなべ会会報誌を確かに受領いたしました。國六様のご努力で功労賞受賞なされた由、心よりお祝い申し上げます。常に前向きに、多くの畑で知識の種を得られ、会報誌の内容も充実していて楽しく読ませていただいております。

ところで、今回の会報誌の「小泉八雲」のお話も興味があります。昨年、ギリシャのアテネより近くの小島キテーラ島へ参りました。昔から行って見たい島ではありましたが、ここは観光地ではなく、やっとフェリー及び小さな飛行機で行ける様になりました。

このキテーラの町には小泉八雲の母親の家があります。昨年探しましたが見つからず、またの機会を待つことにしています。

アイルランド人の父親が陸軍医で、ギリシャ人の母親と知り合い生まれた小泉八雲は、長じた後ジャーナリストになって渡米し、そこから日本行きが計画されたとのことです。わたしは松江の八雲の家を訪ねていますが、アイルランドの思考と日本の思考が何処か繋がるのではと、国連のアイルランド人の同僚と話したこともあります。

娘夫婦と日本の味『お好み焼き』を楽しみました

さて、こちらは第四回目のロックダウンが11月22日より12月12日まで導入されました。このところ、そのロックダウンの真最中にオミクロンというかなり感染力の強いウイルスが欧州に入ってきました。多分ロックダウンの期間が長引くのではと心配です。

私方では、年末の行事であるクリスマスを迎える時節になりましたが、昨日は第一アドベント*でしたので娘夫婦の直子とアクセルがやって来てお好み焼きを一緒に楽しく味わいました。鳥ヒレ、海老、いか、山芋、紅白菜（キャベツがなかったので）、椎茸、サヤエンドウと結構日本の味に仕上がり皆嬉しそうでした。この楽しいひと時の写真です。同封しておきますのでご笑納ください。

いよいよ雪と共にそろそろ年末の雰囲気が漂ってきました。でもあまりに早く時が経ち、驚きの目を見張っております。向寒のみぎり、充分にお身体ご自愛ください。

２０２１年　11月30日　　友子

＊アドベントとはクリスマス前の約４週間前を指した意味のことで、今回その第一週目の日

岡山から

昨年の大河ドラマには渋沢栄一が採用され、彼の偉大さが再確認されたものと思います。彼は岡山備中地域と関係が深く、この地域には一橋藩の三万石見当の飛び地があったため、ここへ農兵募集に来ている。ここで阪谷朗廬や三島毅（中洲）とは生涯に亘る関係が出来上がるのである。

阪谷朗廬

三島中洲

このほど、筆者の友人である高橋義雄氏が「日本近代社会を創造した渋沢栄一」と題する論文を高梁川流域連盟機関誌「高梁川」に寄稿されている。その一文を紹介したい。

…【渋沢は自らの経済・実業と道徳の一致を標榜する立場のよりどころとして中洲の「義利合一説」

渋沢栄一

6頁に続く

を常に意識していた」と指摘され、また論語の解釈においても、栄一は中洲が著した「論語講義」（明治出版社、大正六年）の解釈に負っていた、と論じている。

備中人である三島中洲と渋沢栄一などとの人脈づくりは大きなものがあると筆者は考えるのである。

また山田方谷や三島中洲はともに教育と人材育成に尽力されているが、弟子の数では方谷は三千人、中洲は五千人といわれるとしている。方谷は備中高梁を中心として、また中洲は東京を中心として各界に及んでいるとしている。この両者の謦咳に接した弟子やその思想を継承した人、儒学、陽明学の精神を生かした人たちを例示紹介されておられる。

谷川達海、岡本　巍、大原孝四郎、大原孫三郎、川崎祐宣、守分　十、松田荘三郎、団藤重光などである。

大原孝四郎

大原孫三郎

川崎祐宣

守分　十

団藤重光

広島から

現代は、情報化産業の真っただ中で生活を強いられるのが当たりまえになった状況になってしまっている。あまりにも情報化が進展してきて、わたしども高齢者にとっては難儀となっている次第である。デジタルという抽象的な世界ではなく、身近に自己実現できるマニュアルの世界で生活し、人間性を肌で感じることが出来る生活を願うものである。ゆっくりと考える生活をしてみたいとも思う。

幾分前の新聞記事であるが、来る21世紀を展望して、やがて情緒を感じられない無機質な今日の時代の到来を予想した素晴らしい文章を紹介したい。

平成３年（１９９１）５月３日の読売新聞紙上で「あなたの描く21世紀」の入賞論文の入賞者の論文概要が発表されていた。その中で「一般の部」奨励賞が掲載されている。東広島市の小学校教員をされている古山礼子さんの文章である。概要の一部をピックアップしてみたい。

「世は、まさにコンピューター時代、四年生の子供達の家にも、キーボード、ワープロ、ファミコン、ゲーム機、パソコンが氾濫している。パソコン通信を大人の人とやっているという時代の申し子のような子もいる。しかし、私が一番心配なのは、ファミコンによる疑似体験である。ファミコンでは、王国へも行けるし、…。ボタンを押すだけで夢が見られるのだから、子供たちが夢中になるのも無理はない。だが、その手軽さが怖い。戦争もボタン一つでやってのけてしまう。…結局は、ブラウン管の世界の中で繰り広げられるのだ。子供達の地道な努力やしんどい体験を伴ったものではない。自分で切符を買い、列車に乗り、見知らぬ人や自然と触れ合いながら旅をするのでもなく…ボールを追っかけて汗を流すのでもない。機械が動いているだけなのだ。

機械を相手に、子供達が、いくら心を躍らせてでも心の成長は望めない。人にもまれ、人と語り合い、人の心に触れて、人として成長してゆくのだ。

二十一世紀に生きる若者達に大切にしてほしいのは、自分自身の体験である。手抜きをしないで、自分の体験を積み、人間的に成長していってほしい。広い心を持った人間達が生きる地球は、きっと、素晴らしい星になるにちがいない。他の動物達や自然も、優しい人間達と、うまく調和するはずである」。

このような概要であるが、今日の現況を鑑みると、社会全体が急き立てられてしまい、観念的な、空虚な社会環境下にあり、現場教育や実質的教育が出来ない状況になっているのではなかろうか。他者との関係性が思慮の中に入らず、悪い意味の「自己中心主義」になっている。最近起こった若者の犯罪を見てもそれをわたしは感じるのである。

岡山まなべ会から

真鍋直己氏

―真鍋島の秘宝…外伝―
西　行

右の表題が付いた冊子本が最近贈られてきた。直己氏は長年にわたって西行を中心軸として真鍋島との関わりを研究されていて、このほど第二巻目の本が筆者に贈られてきた。五十二ページを数える本格的な内容のものである。昨年にも第一巻として四十ページのものを送付頂いた。合計九十二ページであるから、完成するまでには大変な時間と労力を傾注されたものではなかろうか。

内容は保元・平治の乱から源平合戦あたりの歴史記述を縦糸として西行と崇徳上皇との関係、そして讃岐に流された崇徳院の霊の鎮魂、そして弘法大師と関わる善通寺での庵生活など多岐にわたっている。それらの推移論述の中では、西行自身が詠んだ歌を折々にちりばめている。大変な技量を駆使した文章となっている。

西　行

少し内容の概要をお知らせします。

西行は崇徳上皇とは年齢が一歳上であるが、崇徳上皇がまだ天皇の地位にあった時は北面の武士として仕えていて、天皇が行幸の折には随行していた。西行はそもそも、公家の徳大寺実能家に仕えていた。この実能の実妹が鳥羽天皇の中宮になっている待賢門院璋子（たいけんもんいんたまこ）である。彼女は崇徳と後白河の生母である。しかし両天皇は同腹であるが、崇徳は鳥羽天皇ではなく白河上皇と待賢門院との間に生まれた子供であると噂されていた。そのため崇徳と鳥羽との間は疎遠であったようである。鳥羽上皇の死後には、それが後の保元の乱発生源になったのである。崇徳側が破れて、仁和寺に幽閉された時には巻き添えになるかもしれない危険の中で、乱発生の三日後には、いち早く駆けつけて崇徳院を見舞うのである。然し面会もかなわなかった。

その時に詠んだ歌が、

「かかる世に　かげも変わらず
すむ月を　見るわが身さえ
恨めしきかな」である。

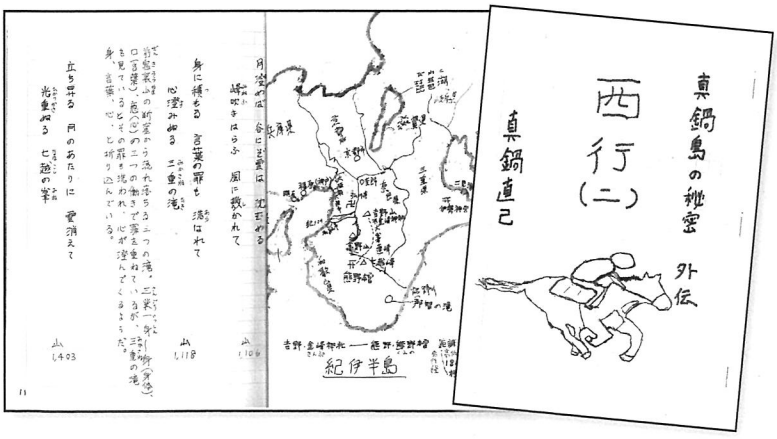
また、崇徳院の霊を慰めるために西行は後には讃岐の白峰御陵に来ている。その時の歌は、

「よしや君　昔の玉の　床とても
かからん後は　何にかはせん」

ところで、西行は桜の花が大変好きであった。死ぬときは桜が満開となる春の時節と望んでいたが、その歌が次の句である。

「願はくは　花のもとにて
春死なむ
その如月の　望月のころ」
＊如月（旧二月）　望月（満月）

かように、西行の代表的な歌を文章の間にところどころ挿入していて、おもしろい構成の著述作品である。



真鍋博士の故郷　新宮を訪ねて

真鍋淑郎博士

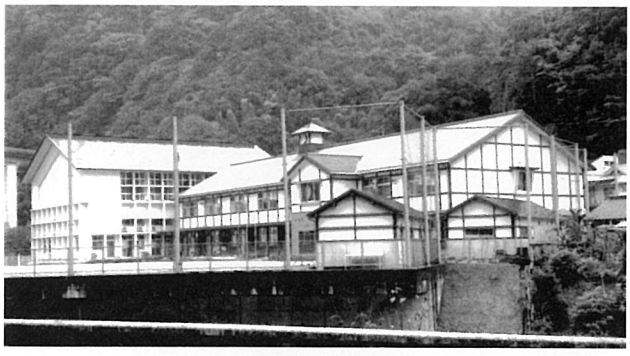
その日は午後の雨の中であった。山あいの谷底らしいところから、濃い霧が柱になってまっすぐ立ち上るのを生まれて初めて見た。

私たちは道端に自動車を停め、車の窓から見えてくるのは杉の林の内ばかりである。すぐその向こうは谷川、谷川の向こう側の岸には建物が迫ってきている。小中学校や、それに個人の屋敷らしきものもある。谷川に架かる橋を渡って向こう側に行くと、車を回せるぐらいの、割と広い土地があった。

身近なところで勢よいよく霧が立ち上るのを観たのは初めてで、周りは昼なのに薄暗くなっている。あの霧の中には仙人が乗りこんでいるのか、そうでなかったら神の使いの仕業なのか。この日のような霧の動きに遭遇すると、いやはや大変な驚きと不思議な気持ちにさせられる。犬も猫もそして人も見つけられないし、野鳥の鳴き声も聞こえてこない静寂の中であった。やっと林業に従事しているらしき人が一人、二人と杉の木の間に保護色で紛れ込んでいるのを発見した。

さてこの新宮という土地は、わたし達親子にとって思い出の残るところである。少しこの辺りを訪ねてみたいと思い、丁度名古屋から帰ってきていた娘に誘われ多度津から自動車に便乗して二人でやって来たのである。

それというのも、ここの学校で主人は教員生活をしていたからである。「父ちゃんはここで一年新採用の教員暮らしをしたのやなあ」、「彼は日曜日には食料などを仕入れに香川の自宅へ帰ってきて、リュックサックに色々準備し、また列車に乗って帰っていった。駅で降りては、そこから遠いところを歩いて山へ登って宿舎まで帰るのを通例にしていた」。また、「冬の夜は、枕元へお茶碗に水を入れて置くと、翌朝には、水は凍っていた」と厳しい宿舎生活をわが娘にも語ったのである。それでも、父ちゃんの学校には宿舎があって良かったのであろうか、不満ごとは何も言わなかったので父ちゃんは満足していたのかもしれない。私だったら困ったであろうと想像する。



新宮小学校

塩塚高原

ところで娘と自動車で来たのでこの辺りを少し見物したいと思い、車を先へ進めることにした。少し行くと「すすきと野菊の塩塚高原」がある。大変美しい高原であった。塩塚高原から少し下っていくと懐かしい新宮小中学校が見えてきた。そこも少し下っていくと、開けた土地があり、そこには道の駅があった。ここに立ち寄り休憩と物見見分をした。

この道の駅構内には『ノーベル物理学賞真鍋淑郎博士生誕の地』と掲載された立て看

道の駅

板があった。今日は運悪く休みの日であったらしく、誰もいない駐車場の中に一つだけ立て掛けてあった。東大の大学院を出て博士号を得たけれども、当時の日本には彼を受け入れる職もなかった。自由で展望が開けていたアメリカに渡って、自分が興味を持つ地球物理学の研究に邁進したのであろう。

やがて資本主義経済の高度化につれて地球環境は極度に悪化してきた。この状況に至ることを予想して論拠を示して警鐘を鳴らしてきたことが今回のノーベル賞受賞に結びつくことになったのである。地味な分野での受賞であるが、これは博士がこの厳しい環境下に生誕して、自然が持っている摂理に心寄せ、誠実に対峙してきたことの当然の帰結であったかもしれない。真に逆境に居た人物から人材が生まれてくると言われる所以でしょう。

この雨の中にぽつねんと立つ一本の顕彰看板を観ていると、何故か現在の科学振興への日本の立ち位置が貧弱になっているように思えて、一抹の寂しさを感じてならない。しかしここは今まで辺境の土地ではあったが、高速の土佐道や阿波道が開通したことで、四国の中心圏域になっている。古くからここは新宮茶という銘茶の生産地でもある。今般の**真鍋淑郎**先生のノーベル賞受賞により当地が脚光を浴びることになって環境が変わってしまったと思えるのです。この地に新しい夢と希望が芽生え、創意と工夫が一層されるのではないでしょうか。**淑郎**先生と地元民との連帯感は強いと聞き及んでおりますので、地域住民の今後のご活躍を祈念申し上げたいと存じます。

古くから新宮茶の生産地である

＊本稿は、香川県多度津町在住の友人政本伶子さんからの実話と情報を基に、彼女との共同寄稿文であります。今後の地域創生や活性化には大きなエネルギーが必要です。この地に誕生された**真鍋淑郎**先生の偉大さに感服し、当地に温かい薫風が吹き込み住民の皆様方が地域資産の発掘と加工により展望が開かれますよう祈念申し上げたいと存じます。

多度津町在住
全国まなべ会
真鍋國六
（山田）方谷研究会会員

静岡新聞より

昨年７月３日熱海市の伊豆山で大規模土石流が発生した。この地は、山岳修験道場としても有名であるが、若き日の源頼朝と北条政子が忍び会い、愛を確かめあった場所でもある。

この土石流で、被害にあった太田佐江子さんと当会の**真鍋梅美**さんとは友人であり、ともに『富士山と末代上人熱海の会』の発足に関わった人たちである。

静岡新聞

令和4年(2022年)2月22日(火曜日)　第28737号　(日刊)

残土の闇 .4

第1章 変わりゆく聖地

① 平安から続く信仰の場

修験の道 断たれた陰で

末代上人の供養塔で、太田佐江子さんの冥福を祈る歴史愛好仲間＝1月下旬、熱海市

※地元での真鍋一族にかかわる新聞報道やトピックスがありましたら、どんどんお寄せください。会報誌を通して会員に紹介いたします。

瀬戸内「いろは」カルタ

中国から発生したコロナ感染は、丸二年を越しても沈潜化していないのである。この令和四年二月に入ってもなお日本においては、先の第五波よりピークは高くなっており、対応に苦慮している現状にある。

この公衆衛生に関する感染症の対応については、江戸末期から明治初頭にかけて日本においても経験している問題である。人命に関する重大な危機に遭遇していることは、この時代の有識者たちの記録から知ることが出来る。この時代に迎えた西欧への開国策により、諸々の感染に関わるウイルス・病原菌が日本国内に流入してきている。これらの病原菌に対処するため、当時国政に関係した人たちは右往左往しながらも、有能な人材をかき集めて対処していたのである。この頃医学治療の大家緒方洪庵を江戸へ招聘して治療に当たらせている。この頃各藩においても西欧の医学吸収のため、当時の先進地長崎に留学させていた。この頃に蘭学や医学への関心が各藩でも高くなってきていた。この時代には津山藩の宇田川家や箕作家が有名であり、医療に関する人材が全国に誕生している。殊に東では江戸、佐倉であり、西では備前・備中・美作である。また福井藩などが有名であった。当時西洋からの感染症流入に遭遇しては、当時の医者たちは大変な状況に置かれ、命をかけて対応しているのである。事実、緒方洪庵は幕府に登用され、多忙を極めた結果命を縮めている。

この幕末期に筆頭老中であった備中松山藩の板倉勝静の懐刀であった山田方谷を紹介したい。彼は文化二年（１８０５）、備中松山藩内の西方村で生まれた。文化六年五歳の時に新見藩の儒学者「丸川松陰」塾で学んでいる。父母は、彼が十五歳前後に相次いで死去し、十六歳で家業の農業、菜種油の製造販売に従事することになる。この後も生業と学問に励んでいた。しかし、生前には彼の両親が山田家再興のため幼児の大五郎（方谷）に大いに期待し、学問習得の心得を吹き込み感化していたのである。彼、大五郎は幼児のころから神童と言われるほど非凡な才能を持っていた。実直で勤勉な彼を周囲の人達は見捨てなかったのである。彼の心温かさや誠実勤勉さの故であり、修学意志が強く心温かい性分は、特に彼の母親からの訓育環境によるものであった。二十一歳の時には、篤学の名声が四方に広まり、時の藩侯から二人扶持を支給され公的援助を受けることになる。これから彼の運命は開かれてゆくのである。その後は次の藩侯である板倉勝静とともに藩政改革、そして板倉勝静の筆頭老中就任とともに国政での施策に意見具申することにもなった。

山田方谷

彼の業歴の中では特に国元での業績が顕著であったが、この期間は、藩主の庇護もあり思う存分藩内で手腕を発揮できている。列挙すれば、政治・財政の改革、人材の発掘と育成、地場産業の育成、他藩との外交関係の確立など万端にわたっている。特に財政改革の成功は、彼が仕えていた藩主板倉勝静の幕閣内での出世に貢献することになる。

さて彼の人材育成により多くの弟子や信奉者を生ませているが、藩内のみならず、藩外からも多くの弟子を受け入れている。この人たちが明治維新後も国内において大いに活躍しているのである。公職分野のみならず、民間での新規産業立ち上げにおいても実績を積み上げている。彼を源泉として、彼の「**至誠と惻怛**」の哲学・信条が後の一世代、第二世代、そして第三世代として連綿と受け継がれているのである。例を挙げれば、山田方谷、三島中洲、大久保諶之丞・彦三郎兄弟に継承されているし、河井継之助、小林虎三郎（米百俵の精神で有名）、…ノーベル物理学賞の大村智など、後世においてもその影響が見られるのである。

板倉勝静

三島中洲

大久保諶之丞

大久保彦三郎

河井継之助

大村　智

小林虎三郎

さてこの江戸末期においては、医療行為も些か未熟であったけれども、各藩においても新しい病気の罹患防止に方策を練っている。彼らは真剣に、しかも命を懸けて人命救助の方策に当たっていたと想うのである。例えば華岡青洲の麻酔実験においては、母と妻を犠牲にするかもしれない覚悟で実験の試験体にもしているのである。ここに紹介している山田方谷は**危機管理意識**、**大局観**を持った見方、**未来想定能力の涵養**などの信念を持って藩民を守護するという気持ちが強かった。そして**わが身は質素**に、しかも**我が家の家計は公開**し、**賄賂の厳禁**など徹底していた。真に誠実そのものの人であった。

ところで明治維新という変革期の時代には、多くの逸材が輩出しているが、また太平洋戦争の後にも同じ現象が見られるのである。しかし時代が安定してからは、怠惰心が出てきたのが現状である。今日においては、日本では世代交代が起こり、大企業では雇われ経営者が多くなっている。彼らは会社の未来像を多角的に展望するよりか、むしろ自分の身を維持するために優秀な人材を抹殺して、優秀な二番手の育成を図らないのではなかろうか。その方が自分の地位安定に繋がるからである。特に政治の世界においてはこの動きは顕著である。産業界において飛躍的に発展している企業は、自由な発想と柔軟な取り組みをして組織自体を活性化している。また発展している地域においては、産学官が協調して新しい取り組みをしてきている。すなわち、大学や研究機関が門戸を開いて敷居を低くして民間に利用しやすい環境を作り出している。例えば中小企業基盤整備機構（財団）が大学内に「インキュベーター施設」を創設して、地元企業と大学との協働作業の推進を仲介したりしている。この中四国でのこの施設はおおよそ十年前に岡大の津島キャンパスに設置されて実行に移されている。この地域の企業にとって利用便利な施設となっている。

この様な施設は、地元の熱意が無ければ誘致できないものであり、地域力すなわち、①地元の現状、②地元の進むべき方向、そして③時代の趨勢（国内外の変革）に関心と展望を持つ力が現在要求されているのである。これらに関心を寄せない地域は取り残されるであろうし、時代を読み解き、先導する総合プランナー・プロデューサーの存在が地域創生のポイントになるのでなかろうか。

さて幕末から明治の転換期においては、産業の育成もさることながら、まずは生命の安全保身が緊急の問題であった。開国したために新しい未知の感染症が流入してきたからである。コレラをはじめとした病気である。当時の蘭学者の中から医学を極めようとする人材が出てきたのである。これが冒頭に記述した地域が有名になっていた。明治期の医学界では「東の東京、西の岡山」と言われていたようである。地域によってはハンデキャップを持って出発した圏域もあったようであるが、国内においては研究の最高学府として七大帝国大学という総合大学が順次設立された。けれども、なぜか中四国においては、帝国大学は設置されずに終戦を迎えることになる。しかしながら現在においては新しい観点から技術系の先端大学も出来ているし、私立大学においても時代の要求する新分野の大学設立や、学部の設置がみられる。然し今回の感染症に対応する公衆衛生などの基礎医学分野については等閑視されていたのか、各地の保健所の機能は縮小されてきた。また基礎医学の面では、有力大学に重きを置いて、むしろ地方大学では貧弱な体制ではなかろうか。

さて現況の新型コロナ感染問題であるけれども、防禦・解決の施策に大変難儀を極めているのであるが、如何せん今回で第六波の大波に遭遇しているのである。どう見ても強力な司令塔となるべき人材がいないのではなかろうか。当初から未来展望の力も不足し、適格な方策樹立とスピード感が不足しているようでもある。そもそも官僚の「事が発生してからでないと動かない」という習性・性癖が今回も発生しているようである。そうでないと公衆衛生関係の組織縮小も、予算割愛もなかったであろう。山田方谷だったらこのような考えをしなかったであろう。つねに鳥瞰の目で周囲に目配りしていたのであるから。事に対処するには有能な人材が必要である。しかし各指標を見ても先進国ではあまねく下位に位置しているのである。立身出世や利益誘導を第一義にはしないでもらいたい。

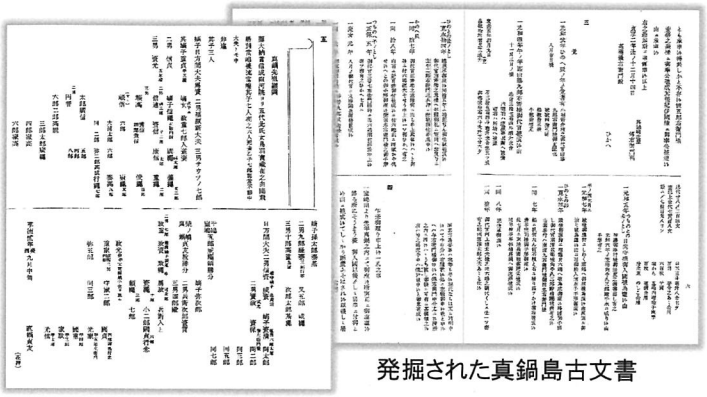
この中瀬戸内地域には弘法大師空海や和気玉虫、山田方谷、大久保諶之丞などの利他精神の持ち主がいたのであった。また渋沢栄一も備中の人材から利他精神の感化を受けていたと考えられる。この大きな難儀解決に国民共々真剣に向かわねばならないのである。

岡山県は社会学の宝庫である

日本国内では、岡山県は社会学の研究地として有名であるが、あまり知られていないのが残念である。このことについては平成六年（１９９４）四月二十日の山陽新聞の論壇で萬成博先生（当時吉備国際大学副学長）が「岡山県は社会学者の宝庫」であると指摘されている。

第二次世界大戦後、米国の大学で始まった「学際・地域研究」の先駆けの基地として日本国内において、岡山県が日本の文化、日本人の気質人情、地理、歴史、産業等の研究対象地として最適であると考慮され、研究対象地として指定されている。ここで、アメリカの代表的な研究機関であるミシガン大学が岡山市内へ研究出先機関を設置している。このことにより、地元の大学なども研究のサポートを行っている。

この大戦終了後頃から日本においても同時に、日本の地域民族の文化遺産についても研究が進められるようになってきた。いわゆる民俗運動である。歴史遺産については、各地の旧家に保存されている古文書の研究、焼き物の研究などである。この時には過去の歴史や文化・民俗・慣習などの研究などが進められ、わが真鍋島からは、真鍋島古文書が研究対象の古文書として発掘されたのである。この研究は宇野先生によってまず進められている。この件については、中公新書の「古文書返却の旅」に詳細が記述されているので一読ください。



発掘された真鍋島古文書

このように関心が寄せられていたのは、近代の経済研究は産業経済の発展推移の研究に比重が掛けられ、むしろ社会学的観点からの視点が等閑視されてきたきらいが有ったからと考えるのである。

つい最近でも、アメリカ国務省が各国社会層の動向を見ようとする動きも見られるのである。この時も日本国内の社会学的研究の対象地として岡山県を選択しているのである。これについては、全米トップレベルの大学生・大学院生が日本語と日本文化を集中的に学ぶため、米国務省の「重要言語奨学金（CLS）プログラム」の受け入れ先に国立大学として初めて岡山大学が採択されている。来日するのは、国務省により全米約五五〇人の応募者から選抜された二十六人である。八週間にわたり、日本語の勉強や地域の自然や歴史に触れるなど、文化交流体験を行う事などである。

岡山大学

これらは、さまざまな専門を持つ留学生に対応できる総合大学のメリットに加え、国連が提唱するＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）を岡大が推進していることなどが評価されたものである。また今回の該当地決定の根拠については、実は、戦後にダグラス・マッカーサーによって日本研究のフィールドとして岡山の地が選ばれ、１９５０年に岡山市に「ミシガン大学岡山フィールドステーション」が開設されたこと、そして、岡山が日本文明の揺籃の地であったという歴史的背景があったことにもよる。

また人材についても観察してみると、まず、一九二四年に社会学会を創設し、初代の会長を務めたのが戸田貞三博士である。備前・閑谷学校で学び、旧制一高首席入学者である。大正・昭和にわたって東大社会学主任教授にあり、多くの日本を代表する社会学者を育成した。二番目には、三十年代初めの会長には九大教授・阪大文学部長を歴任された藏内数太博士である。備中興譲館を経て東大に学んでいる。日本における文化社会学の創始者である。大和王朝に対する吉備王国の役割を文化論的に考証された。三番目の会長は小山隆先生である。備前一宮の吉備津彦神社の宮司の子息である。阪大・東京都立大の教授を歴任され、家族社会学を体系化された人物である。四番目の会長は福武直志先生である。備中大井村の出身である。岡山一中、六高、東大に学んでいる。初代会長戸田先生の門下生である。農村社会学を専門としている先生で、多くの

先人ゆかりの地

ベストセラー書籍を出版されている。また、戦中戦後を通して日中社会学交流についての実績がある。ベネッセの福武氏の一族でもある。五番目の会長は青井和夫先生である。玉野市出身で、東大教授を経て津田塾大や流通経済大学の大学院博士課程を創設されている。

かように岡山県は、戦前戦後に日本社会学会長を独占した時期があった。また、戦後には前述の通り、ミシガン大学が日本研究の基地を設置していたという実績がある。このことは備中松山には著名な山田方谷先生がおられて、幕末前後に政治経済そして学問分野においてこの地域に多大の影響を与え人材を育成してきた。方谷先生の下で至誠惻怛の気概を持って地域貢献に尽くした多くの人材が輩出していたしていたことを証明していると思うのである。備中トライアングル地域は人材の宝庫であったと言われているが、なるほどと県外人ながら肯定せざるを得ないのである。

現今の資本主義は成熟して来ており、金融資本主義とか、強欲資本主義となっており、マネーゲーム化しているのである。欲求する物とか、生活向上のためのサービスではなく、運用回転数の大きい投機的資金運用である。また国籍不明の資金が運用されている。勢い個々人の幸せを意図する方向には程遠いものになってしまっている。今日云われている新型格差社会が到来しているように感じるのである。

国政においても、経済一点張りでは資金運用面でのチェックがおろそかになり、社会生活での影響把握が難しくなる。今や情報化社会にもなり、国籍不明の資金が跋扈し、しかも他国等からのサイバー攻撃も実行されるに至っている。

経済活動を進めながら、同時に並行して多角的な視点でもって社会実態の動向にも注視せねばならないのである。そこに社会学の重みを感じるのである。また、がん細胞化因子の流入も予想されるため独立した監査・監視機関の充実が望まれるのである。しかし日本における未来想定能力は不十分であり、うまく機能していないのではなかろうか。

現今の新型コロナ問題への対応や、各種の外国との施策実績数字の対比を見て、今までの取り組み姿勢に疑問を感じるのである。　香川不器男

令和2年度一般助成金の入金者名

自令和2年4月1日～令和3年3月31日

地区	氏　名	地区	氏　名	地区	氏　名	地区	氏　名	地区	氏　名
北海道	真鍋　正之	埼玉	眞鍋　寛子	岡山	真鍋　康二	讃岐	真鍋　稠	阿波	眞鍋智恵子
〃	真鍋　征夫	〃	眞鍋　清	〃	眞鍋　渉	〃	真鍋　進	〃	眞鍋　光信
〃	眞鍋　和一			〃	真鍋　敏行	〃	眞鍋　雅彦	〃	眞鍋　昇司
〃	眞鍋　和弘	静岡		〃	眞鍋　匡輔	〃	真鍋　芳治		
				〃	真鍋　直己	〃	真鍋　悦造	伊予	真鍋明紀子
東京	真部　裕	近江	眞鍋　武			〃	真鍋　明男	〃	眞鍋美枝子
〃	眞部栄太郎			広島	真鍋　頼人	〃	真鍋　正和	〃	真鍋　信夫
〃	真鍋　祥子	大阪	真鍋弘史2年分	〃	真鍋二三男	〃	真鍋　修	〃	眞鍋　満春
		〃	真鍋　孝	〃	眞鍋　和靖	〃	真部　茂	〃	真鍋　秀男
神奈川	真鍋　利広	〃	真鍋　修一	〃	真鍋　一豊	〃	真鍋　浩一	〃	眞鍋　正幸
〃	(眞部喜孝)	〃	眞鍋　功一	〃	眞鍋　良宏	〃	真鍋　洋逸	〃	真鍋　道博
〃	真鍋　瞬治	〃	眞鍋鋼三郎			〃	真鍋　優介	〃	真鍋　吉彦
〃	眞鍋　忠昭	〃	真鍋　孝久	讃岐	真鍋　光夫	〃	真鍋　雅稔	〃	眞鍋　伸二
〃	眞鍋　緑	〃	真鍋　尚貴	〃	真鍋　康正	〃	眞部　侑平	〃	真鍋　典雄
〃	真鍋　憲一	〃	真鍋　晴幸	〃	真鍋　照幸	〃	眞鍋　厚	〃	真鍋　政信
〃	間部　武之			〃	真鍋　昇	〃	眞鍋　清高	〃	眞鍋　孝敏
		紀州白浜		〃	真鍋　庄二	〃	眞部　勝吉		
千葉	真鍋　久勝			〃	真鍋　雅秋	〃	眞部　喜孝	土佐	土佐まなべ1件
〃	眞鍋　弘	兵庫	眞鍋　宣夫	〃	真鍋　安夫	〃	眞部　忠計		
〃	大津　華子	〃	真鍋　康彦	〃	眞鍋　正則	〃	眞鍋　忠博	福岡	高口　治子
〃	真部　奉明	〃	眞鍋　善英	〃	真鍋　正徳	〃	眞鍋　義次		
〃	真鍋征一郎	〃	真鍋　栄一	〃	真鍋登代子			本部(オーストリア)	眞鍋　友子
〃	眞鍋　篤典			〃	真鍋　信彦				
〃	真鍋　元禄			〃	真鍋　正彦				
〃	眞鍋喜和子			〃	眞鍋　勝信				

*全国まなべ会への温かいご支援誠に有難うございます。なお、役員の方については名簿を省略させていただきます。
今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。これからも皆様に楽しんでいただく紙面づくりに務めてまいります。

編集後記

令和元年の年末に中国で原因不明とされた病気が発生していると、インターネットで発信された医師の指摘した病気は、中国では伏せられていた。しかし翌二年の一月になって世界周遊の外航船が日本の港に入港してから、乗船者の中に感染者がいたのです。大騒ぎとなりました。この感染症は新型コロナであると公表されたのです。この機に及ぶまで世界保健機関のテドロス事務局長の対応の拙劣さが大きな問題となっていた。国際的な影響がある新型ウイルスであるにも関わらず、その責任感の無さに驚いた次第です。

この新型コロナは、現在のオミクロン株の蔓延により日本では第六波を迎えている。この被害は当まなべ会においても例外でなく、全国大会は過去二回の開催停止となっています。また今回の感染状況も終息に至らない可能性もあり、三回目の大会開催もまた不可能になりました。誠に残念至極であります。まなべ会活動は勢いが削がれてしまい、活動内容も貧弱になってしまうのではないかと危惧するものです。従って会報誌に掲載するネタに難儀を来たす次第です。また会員間の交流と親睦が図れないのが残念であります。

この状況に鑑みて、何か会員の皆様に関心と幸せ感を提供できるのは何であろうかと思案探索したのでありますが、如何せん適正なものは見当たりません。従って今まで蓄積している我流の見解などを開陳して急場を凌がせていただきたいと思います。

ただこの期においても情報などをお寄せいただいた方に感謝の念を差し上げ、掲載させていただきました。会員の方々よくよくご笑覧いただけば幸いであります。今後とも皆様方のご協力よろしくお願い致します。

財政部担当　真鍋國六
(山田)方谷研究会会員